

入選 中学生の部

僕ができなかった親切

浜松市立北部中学校 一年

浅田 優介

「お父さんこっち来て。」

これは、家族で旅行しているときに父に言った言葉だ。その時、僕は人があふれる中、一人の外国人観光客に声をかけられていた。僕は、あまり英語が分からない。しかし、ジェスチャーとなんとなく分かる単語を集めていくとその外国人は、「写真をとってください。」

と、言っているようだった。しかし、僕は突然の会話に対応できず、話の意味は分かっているはずなのになぜか父を呼んでしまった。僕は、父に事情を話した。すると父は、外国人の方へ行き、写真をとってあげていた。写真をとり終わり外国人が立ち去ったあと、父から、

「自分でとってあげればよかったじゃん。」と、言われた。確かに自分でもそう思っていた。でも、なぜかオーケーのひとことが出なかったのだ。僕は、いろんな言いわけを心の中でつくって、あれはしょうがないと言いきかせた。しかし、どう考えてもあれは、自分でとればよかったものだ。僕は、人助けが好きで、できないわけでもない。実際に目の不自由な人をゆうどうして目的地まで連れていったこともあるのになぜかできなかったのだ。国籍が違っても言語が違っても同じ人なのに、その違いだけであわててしまつて親切にすることができなかったのだ。そのため、外国人に日本人は、大人だけでなく子供にも人助けの心、いわゆる親切な心を持っているという事を伝え

るチャンスのをがしてしまつたのだ。僕は、後悔した。

僕は、サッカーが好きだ。少し前に行われたロシアのワールドカップも見ていた。その中で日本代表のけんとうもみならず、ベルギー代表に負けた。しかし、スタジアムのロッカールームにはロシア語で、ありがとうというメモが残されていたり、いすなどがきれいに並べられていたことで話題になった。また、日本代表を応援するサポーターがごみ拾いをして帰つた事も話題となった。人助けなど人の役に立つことだけが親切ではないとこの話題を見て思った。日本代表のやつた感謝やマナーなども親切にはいるのではないかと僕はその時思ったのだ。人助けは難しいかもしれないけど感謝の気持ちを伝えたり、公共の場でのマナーを守る事は僕にだってできる。また、ごみ拾いなどのボランティアも僕にできると思う。そう考えると親切は身近な所にあるがっていると思った。

僕は、外国人観光客に親切にはできなかったかもしれない。しかし、まだ僕は中

学生で外国人に日本の子供の心を伝えることができるチャンスはある。そのため、まずは感謝やマナー、ボランティア、そして最終的には、最初の場面と同じような事があってもちゃんと対応し、人助けができるようになることが目標。それに向けて、僕は頑張っている。

ある店での出来事

静岡県立浜松西高等学校中部部 三年

安藤 優

私たちの周りにはたくさんの方の外国人の方がいます。直接的な関わりはなくても見かけたり擦れ違ったりする機会は多く、看板やメニュー表が数ヶ国語で書かれているのをよく目にします。

そんな中、どうしたらよいのか分からず外国人の方が困っていることがあります。私も何度かそのような場面に遭遇したことがあります。英語に自信がなく、話しかける勇気も出せず、いつも何もできずにい

ました。

ある日、友達の子と遊びに行ったときのことです。昼食を取ろうとあるお店に入りました。入ったお店はそれほど広くなく、午後二時という時間帯のせいもあり、私たちの他には外国人のお客さんが二組いるだけでした。

食事の中ふと辺りを見回すと、ある席で外国人の女性の方が何か困っている様子でした。後で分かったことですが、このときスマートフォンがインターネットにうまく繋がらず、どうしたらよいか分からなかったそうです。しばらくすると近くに座っていたもう一組の外国人の方たちが女性に話しかけ、一緒に繋げる方法を考え始めました。そんな様子を見て店員さんも駆けつけました。

それでも解決しなかったようで、私たちの席に店員さんが来て、「あの外国人の方のスマホがお店のWi-Fiと繋がらないみたいなんですけど、やり方って分かりますか？」

と言いました。私たちもその席に向かい、

様子を見に行きました。繋げ方は分かったのですが、ちゃんと英語で伝えられる自信がなく、話しかけるのが怖くて結局私たちは何も話せませんでした。

そこにさっきの店員さんが店長さんを連れて戻ってきました。繋がらない原因を伝えると店長さんが外国人の方に英語で説明し始めました。その英語は私たちでも分かるような簡単なもので、分からないところは単語を並べたり、身振り手振りを使ったりしていました。最終的に何とか伝わり、無事インターネットに繋げることができました。

誰も何もしなかったら女性の方は困ったままだったかもしれません。最初に話しかけた近くにいた外国人の方たち、店員さんの行動力に圧倒されました。そして、店長さんのように助けようと思うだけでなく行動に出れば、必ず相手の為になるのだなと実感しました。今思い返せば何一つしなかった自分が少し恥ずかしいなと思いました。

いきなり外国人の方を助けるときの

は、なかなか難しいと思います。言葉に關係なく困っている人を助けられるよう、まずは身の回りで困っている人がいたら自分から行動して助けられるようになりたいです。

車いすのおじさん

静岡市立大里中学校 一年

池西 亜佑美

私は、初めて会った人に声をかけたり、話をしたりするのが苦手だった。困っている人を見ても、体が固まって動けなくなってしまう。気持ちは、その人の側へ行き、声をかけ助けているのに、実際にはその場に立ったままだ。いつも、後悔ばかりが残ってしまい、自分が嫌になってしまっていた。小学校六年生の時だった。友達と学校から帰る途中、友達と別れ歩いていると、目の前に車いすに乗っているおじさんが困っている姿が目に入った。体が自然に動いて、おじさんの側へ行く自分にびっくりしてい

た。前にテレビで、足の不自由な人が車いすを使うことの難しさについて話していたことを思い出したからだ。車いすは道路の段差にはさまり、おじさん一人では動かなくなっていた。私は、一生懸命持ち上げようとしたけれど、重くて動く気配すらない。私は悲しくなってきた。気持ちより体が先に動くほどおじさんが心配で、早く楽になればとかけよつたのに、何の役にもたてない。その時、近くを通った友達も力を貸してくれた。どうやって車いすを動かせたのかわからないほどの必死な自分に驚いた。そして、手伝ってくれた友達に感謝の思いでいっぱいになった。おじさんもとて喜んでくれた。おじさんの「ありがとう」という言葉には、たくさんの温かい気持ちがつまっていた、その言葉はとても大きな力を持っていて、助けた私が元気になった。私はとてもうれしかった。その時、すごく気持ち良かったことを覚えている。

私は人を助けたのは初めてだった。その私を助けてくれた友達がいた。私一人では助けない気持ちはあっても助けられなかつ

た。人間は一人では生きていけない。みんなに支えられ助け合って生きている。一人の力は小さくても、その小さな力が集まると、とても大きな力に生まれかわるとその時思った。すごいことだと感動した。

中学では、地域清掃ボランティアという地域活動がある。四日間あるボランティアに、私は全て参加した。あの時の思いがあるからだ。小さなゴミをみんなで拾う。『こちらも積もれば山となる』ということわざもあるが、本当にみんなが集めたゴミの山はすごかった。だんだんきれいになっていく町の中を流れる空気が気持ちよく感じた。

小さな力が集まって、大きな力になることをここでも感じた。私達一人一人が困っている人を見たら、手をさしのべる優しい気持ちがあれば、きっとみんなが笑顔になれる。私達が住んでいるこの町を愛する気持ちがあれば、町に落ちているゴミは一つもなくなる。こうした小さな優しい気持ちはみんなを笑顔にかえる。これが私が思う本当の『親切』ではないかと思う。見返りを求めるのではなく、思いやりを持って人

のために尽くす。そして小さな優しさでみんなが笑顔になれること。

つながる親切

静岡市立観山中学校 二年

入江 瑠

私は、親切とは何だろう？と、ふと疑問に思ったことがあります。私は、いつも何か手伝いをする時、(気付いてもらいたい。有難うと言ってもらいたい。)と思います。でも、誰がやったか分からない、誰も気付かない「見えない親切」があるということを知りました。それは、私が小学校六年生の時にあった話です。昼休み終了間際、トイレに行ったら、スリッパがぐちゃぐちゃに散乱していました。私は、時間がなくて後で揃えればいいやと思い、トイレに入りました。すると、トイレから出てくるとスリッパが綺麗に揃っていました。私は、とても驚きました。有難うと言われない、誰がやったのかも分からない小さなことでは

あるけど凄いなと思いました。私は、なぜかその時、自分がやったことではないけど、嬉しくなりました。そして、私もスリッパを綺麗に揃えてトイレを出しました。きっとその時の嬉しさは、綺麗なスリッパを見て感じた清々しい気持ちだったのだと思います。今では、スリッパや靴を揃えるのが楽しくなり、習慣になりました。

その他にも、少し蛇口から水が垂れていると止めたり、ゴミが床に落ちていと拾ったりするようになりました。今までは、気付いてもらったり、有難うと言われないと思ったりして、見える所でしかやっていませんでした。でも、このことをきっかけに自分自身が気持ち良くなったり、嬉しくなったりすることで行動するようになるようになりました。

またある日、もう一つ親切で気付くことがあります。それは、「つながる親切」です。私がやってた小さな親切を見ていた友達がいました。その友達は、教室に落ちているゴミを拾っていました。私は、「偉いね。」

と、声をかけると友達は、「ほっちゃんがいっつもやっていることですよ。私も偉いなと思ったからやっているんだよ。」

と、言われました。その時、私は嬉しくてたまりませんでした。

小さな親切を重ねるとそれを見ている人がいて、見ていた人が真似してまた親切をする。そうやって心と心がつながって、沢山の親切で社会は包まれているんだなと思いました。私は、親切って凄いなと思いました。親切とは何だろう？親切とは、人に對する思いやりだと思います。これからも沢山の親切が溢れるように、自分が出れることを行っていきたいと思います。



相手へ、そして未来へ

長泉町立長泉中学校 二年

大羽 綾香

私が考える親切。それはした人も、された人にも、日常の何気ない時間、生活を少し明るくしてくれるスパイスだと思う。親切があることで自分の生活や相手の生活が輝き、かけがえないものとなる。たとえその親切が、自分にとっては米粒くらい小さくても、受け取り方によってはその何十倍にも大きくなって、相手の人生を動かす力となるかもしれない。親切には大きさなど関係ない。無限の可能性を秘めているのだ。

それは、日常のあいさつにもあてはまる。私の学校では、朝、定期的にあいさつ運動を行っている。校門付近に立ち、道行く人にあいさつをすることで、町を活性化させようというものだ。あいさつ運動中は、たくさんの方が通っていく。学校に向かう中学生。重たい荷物を引きずりながらも懸命

に歩く小学生。子どもを後ろに乗せ、自転車で幼稚園へと向かっていくであろう女性。汗をかきながら急ぎ足で職場へと向かうサラリーマン。皆向かう先もすることも

違うが、次の目的へ向かおうと一歩を踏み出し、進んでいる。たとえ困難な壁にあたってたとしても、人々は前へと進んでいかなければならない。それぞれの立場で懸命に努力しているであろうこの人たちに、私は何ができるだろうか、ふとあいさつをしている私の頭の中で疑問が浮かんだ。試行錯誤をくり返したが、結局私の中の答えをみつけることができずに、あいさつ運動は終わりを迎えようとしていた。先が見えない私の前に、ふと近所の見守り当番であろう方が近づいてきた。そして私の前で止まり、こう告げた。

「いつもありがとうね。」

と。私は、この言葉をきいたとき、一瞬間感った。ようやくその言葉の意味を理解したとき、私は悟った。あいさつそのものが、人の心を動かし、前へと進む力を生みだすきっかけとなるのだ。あいさつそのものが、

する人の心にも、される人の心にもあかりを灯し、何気ない生活に少しの幸福を与えてくれるのだ。

私は、そのことを悟った瞬間から、自分の心の中にある小さな親切、すなわちあいさつのダイヤルが動き始めたような気がする。たとえば、「こんにちは」の五文字でもその一文字一文字にこめられる思いは、こめる人によっては壮大なものにできる。私は、普段のあいさつに気持ちをこめて言うようにした。友達なら感謝の気持ち、先生なら尊敬の意をこめて。その気持ちが少しでも届き、相手の心を動かせるようにと願って。

皆の心に存在するであろうあいさつのダイヤルを動かせるかどうかは、相手を想う気持ちがあるかどうかだと思う。きっと、その気持ちは相手へと伝わり、次なる力へと変わっていくだろう。何気ないあいさつが次の人へと伝わり、つながることを信じて、私は道行く人々へあいさつをする。そして、これからも。

親切のおかげ

磐田市立豊田中学校 三年

大橋 咲来

私の祖母は、身体障害者に認定されています。私が生まれる前に肺炎を患い、その後遺症で肺がスポンジのように固くなってしまっているそうです。だから、肺がうまく機能しないので二酸化炭素をうまく出せません。祖母は約五年前に、酸素ボンベをつける生活になりました。祖母は、初めは鼻にチューブがついていることを嫌がって、大好きだった外出をさけるようになりました。私はすごく寂しかったです。もつと一緒に外でかけたい、前みたいな明るい祖母に戻ってほしい。ずっとそう思っていました。

ある日、祖母がデイサービスに通うことになりました。私も一緒に、祖母のデイサービス見学に行きました。そこでたくさん友達ができ、たくさんおしゃべりをして、どんどん祖母が元気になりました。それか

ら、祖母の外出する機会が増えて、久しぶりに髪を切りに行きました。その店員さんが、祖母の酸素のチューブがとれてしまわないように、テープでチューブをとめてくれたり、祖母が苦しくならないように、と中で休ませてくれたりしました。きっと祖母は、こんな親切なことをしてもらえると、思っていなかったんだと思います。この店員さんがしてくれた親切によって、さらに祖母の外出が増えました。よく祖母と行っていた、竜洋や袋井のショッピングセンターにも行きました。祖母とたくさん買い物できて、とても楽しくてうれしかったです。

しかし、去年の十二月頃、急に祖母の体調が悪くなり、ベッドの上での生活となりました。そこから、家にヘルパーさんや訪問看護師、病院の先生が来るようになりました。

祖母には、大好きな看護師さんがいて、いつもその人が来るとすごく元気になりました。ヘルパーさんや看護師さんは絶対に、祖母の体調に合わせてくれました。それが

その仕事上あたりまえかもしれないけど、それは親切でもあると思います。親切は、そんな形でもすることができます。

祖母の家の向かいの人は、祖母のためにふきを持ってきてくれました。わざわざ家が上がって、おしゃべりが大好きな祖母とたくさんお話をしてくれました。隣の家の人も、家が上がってたくさんお話をしてくれました。これも親切だと思います。親切をするのは難しいとか、きん張すると言っている人がいますが、私は相手のことを思っただけで行動することや、心配することは親切だと思います。特に大きな行動はしなくても、親切はできます。だから親切は誰にでもできます。

祖母は今年亡くなりました。祖母のおかげで、人を思いやることや、障害を持つ人の対応を学びました。これからも、人に親切にすることをこころがけていきます。

たった一つで

富士宮市立北山中学校 三年

勝亦 理紗

私は心が痛かった。何もできなかった自分に腹が立った。

私は姉のすむ東京に遊びに行った。その時乗車した電車は満員だった。長い間外を歩いていて疲れていた私は、空いていた席にすぐに座った。顔を上げると私の前には妊婦さんが立っていた。満員電車に大きなお腹で立っているのは大変そうだ。はっとしたが、満員電車の中で立ち上がり席を譲るのは勇気がいる。周りの人達は知らん顔でスマホを見ていた。周りの空気に流され、私も下を見ていることしか出来なかった。下車してからさっきの妊婦さんのことが気になり、モヤモヤした気持ちが残った。

帰日も私は電車に乗った。夜も遅かったので人は数人しかいなかった。昼間の人の多さが嘘のようだ。しんと静まり返った車内にビールの缶が一つ転がっていた。電車

が動くたびに私の目の前を転がっていく。このアルミ缶どうするんだろう。前に座っていた女の人はアルミ缶が転がってくると、迷惑そうな顔をして両足を上げて避けていた。

「あのアルミ缶どうするの。」

隣にいた母に聞くと母も、

「困ったね。」

と言っただけだった。車内の人達はみな、一つのアルミ缶に注目していた。この冷たい空気の中、私はまた見ているだけになっていた。そんな中、若い一人の男性が立ち上がり、アルミ缶を拾ったのだ。私と母は思わず、

「わあ、すごい。」

と声に出してしまった。男性は少し微笑み、次の駅のゴミ箱にアルミ缶を捨てた。私はその男性の行動に感動した。あの空気の中、立ち上がるのはとても勇気のあることだ。さりげなく拾って下車していった彼はとてもかっこよく輝いて見えた。

その反面、私はまた動くことが出来なかった自分を不甲斐なく思っていた。やら

なければと思ってもなかなか動く勇気が出ない。姉に電車の中で体験したことを話すと、

「分かっていても気づかないふりをしてい
る人は多くいるよ。アルミ缶はよく転
がっているのを見る。」

と言われた。そんなことが普通に起きてい
るなんて私は残念に思った。でもその中
には、私と同じで動きたくても勇気がない
という人もたくさんいると思う。そういう
人達が勇気を出して動いていけば、それを
見た周りの人も自然と動けるようになるの
ではないか。私はあの男性から勇気を出す
こと、みんなのために動くことの大切さを
学んだ。私も人のために動けるあの男性の
ようにかっこいい人になりたい。相手のた
めに席を譲る、一つのゴミを拾う。一人の
たったそれだけの小さな意識で社会は大
きく変わっていく。

伝統と親切

富士宮市立富士宮第一中学校 三年

川口 美羽

「最後に着たのはいつだっただろう。」

そんなことを口ずさみながら、慣れない手つきで帯をキュッと締め、修学旅行以来の下駄を履いた。

「行ってきます!!」

今までで一番爽やかに家を出たのではないかと、というほど美しい去り際だったと思う。そして、車に乗った私は、友達とたわいのない話をしながら、目的地へ向かった。その日はすごい猛暑だった。しかし、それよりも、人混みの熱気が気温に勝り、多くの人の浴衣が着崩れていた。屋台を一周し、日陰で涼む所を探していた時だった。

「ちょっと、いい?」

と、私達は呼び止められた。誰が呼ばれたのか。それとも、私達全員か。そう考えていた時、

「黒と白のボーダーの浴衣の子、ちょっとここへ来てくれる?」

私ではなく、私の隣にいた友達が呼ばれた。

彼女は言われた通り、脇道に外れた。

「あなた、合わせが逆だよ。」

と、言われた彼女は、周りを見回し、やっと自分の立場を理解した。

「あ、本当だ!」

そう、彼女だけ右上、他の皆は左上で合わせていた。家に帰った後、祖母に聞いたのだが、右上に合わせると、棺の中に入る人と同じ事になってしまうことを知った。そう思うと、あの女性達に直してもらった事は、幸運な事だったと私は思った。すると、一人の女性は言った。

「本当は気づいているけど、言ってくれない人が多くなってきているから、言ってくれただけありがたく思ってたね。」

と微笑していた。そう考えると、今まで何気なく通り過ぎていた人達は、彼女の異変に気づいていたのだろうか。本当に幸運な事だった。彼女も同じ事を思ったのか、

「ありがとうございます。」

彼女は、深く頭を下げ、私達も感謝の気持ちを込めて、お辞儀をした。

「では。」

そう言い、女性達のもとをあとにした。その後も屋台を転々と回り、一日を楽しむことができた。きっと彼女は清々しい気持ちで祭りを楽しめたことだろう。そう思うと、少し胸がじわじわと温かくなった。

現在、日本の文化と言えど、あまり着用されない浴衣。しかし、時々着るからこそ、正しく着たいのが浴衣でもある。あの女性達や祖母は、浴衣の着方を知っているのは、当たり前なことだが、私達は当たり前として知られていない。しかし、世代から次の世代へ受け継ぐことで、日本の伝統を守ることになる。

私が目の前で見たこの小さな親切は、日本の伝統を守ることもある。小さな親切が、大きな役目を果たす、ということをこの体験から実感した。

理想と現実

静岡市立高松中学校 三年

菊田 千夏

今日、歩道橋で重そうな荷物を持ってつらそうなおばあさんを見つけたので、声をかけて荷物を持つのを手伝ってあげました。今日、バスに乗っていた時おじさんが座る場所のないようだったので、席をゆずってあげました。「よいこと」としてこのようなことがあげられているのを私はよく聞きます。しかし、私の普段の生活の中でこのような状況になったことは一度もないし、そう感じるのは私だけではないと思います。そんな環境ですごしていた私は、「困っている人がいたら自ら助けにいくべきだ」という教えに、そんなことはあたりまえで、だれにだってできることだと思っ
ていました。自分の頭の中では、お年寄りの方の手をとってサポートしている自分がイメージできていたような気がします。

夏休み、三年生になると高校の体験入学でバスに乗る機会が増えました。夏休み最後の体験入学に向かっていた日、停留所でドアが開き、人が乗り終わっているのにどうもドアが閉まらないと思いついてみる、一人のおじさんがいました。そのおじさんは両手に大きなビニール袋を持っていました。バス乗車口の段差に手こずり、段差に荷物を置きカードを出し、というのをゆっくり着実に行っていました。長いというのは私だけではなく、バスに乗車していたほぼ全員の人が感じていたようで、そのおじさんは注目を集めていました。私のような周りの変化に気づくことが得意でない者が強く感じたのですから、あのおじさんは痛いほど感じていたと思います。すると、そんな状況を見た私の通路をさ
んだ隣に座っていたおばあさんが、「大丈夫ですか？ 手伝いましょうか。」
と
いって座席まで誘導していました。そして、そのおじさんが下車する際も全員がおりてからも荷物のせいかなかなか立ち上がれていない様子でした。私は運転手さん

からおじさんの姿が見えるような隙間はないと感じていましたが、運転手さんはしっかり気づき待っていてくれていました。

私自身こんな間近でこんなよく聞くような体験をするのははじめてでした。しかし、私は自分のイメージ通りの行動ができず、まして自分が助けなければという意志にはたどりついていませんでした。そんな中で手をさしのべたあの女性の行動力はすごいことなんだと実感しました。そう考えるとあのバスの運転手さんは周りを常に見ていて、あの時一緒に乗車していたあの人は行動には移さなかったけれど、暖かい目で見守ることができていたんだと思います。そう考えるとあの時間、あのバスの中ではたたくさんのその人らしい親切があられていただんだと思いました。

親切で笑顔

静岡市立安倍川中学校 三年

齋藤 咲李



私が、家族との旅行で熱海に行くために電車に乗っていたときのことです。私たちの隣には五人から七人ぐらいの海外からの観光客たちがいました。しばらくして、電車が止まり、二人の大きな荷物を持ったおばあさんが乗ってきました。見渡す限り空いている席がなく、二人ともどうしようかと困っているようでした。心の中では席をゆずるべきだと分かっていたのですが、今までそんな場面に出くわすことがありませんでした。いざ知らない人に席をゆずろうとすると恥ずかしく、少し焦った気持ちになりました。体は思うように動きませんでした。しかし、まだ若く荷物もたくさん持っていないのに席に座ったままの自分のほうが恥ずかしく思え、おばあさんたちに話しかけようと思いました。そのときです。海外から

の観光客の人がおばあさんたちに話しかけに行きました。はじめに話しかけたのは、たしか黒人の男性だったと思います。私は驚きながらその光景を見ていました。その男性は、カタコトの日本語と身振り手振りで、おばあさんたちに、「ドウゾ、ココ。」

と言っていました。おばあさんたちは、「ありがとうございます。ありがとうございます。」と言っていました。おばあさんも海外からの観光客も笑顔でした。それを見ていたら、なぜか私にも笑顔が伝染してきました。すごく心が温かくなったのを覚えています。おばあさんたちが座ったあと、海外の観光客の人の中に日本語をしゃべれる人がいたのか楽しそうに会話をしていました。このようなところで素敵な出会いがあるんだと、すごいなと思いました。私は、一人で嬉しい気持ちになりました。何より嬉しかったのは、海外のかたが日本に来たときに親切をしてくれたということだと思います。国境を越えた優しい親切を見たとき、本当に嬉しかったです。さらに、一番はじ

めに話しかけに行った行動力のある黒人の男性が、親切でかっこいいなと思いました。この出来事は、おばあさんたちにも、海外から来ていた観光客にも、良い思い出になったのではないかと思います。なぜなら、見ていただけの私がいかなにも嬉しい気持ちになれて、今でもしっかりと覚えている素敵な思い出になっているからです。

私が、今回の出来事で学べたのは、国境を越えた親切の素晴らしさです。親切は、しても、されても、見ても、できなくても笑顔になれるものではないかと考えます。親切をできなかった人は、誰かがしている親切を見て次はできるよにと勇気を出してもらったのです。次からの私は勇気を出して一言言えるような気がします。私だって、あの黒人さんのように、かっこいい人になりたいから。

地域の人のために

長泉町立長泉中学校 二年

阪口 凛

私の祖母は毎日、公園の清掃をしている。雨が降っている日、蒸し暑い夏の日、やりたくないと感じる日、があるのかは不明だが、毎日毎日、公園の清掃を本当に一生けん命にしてくれている。本当にえらいと思う。私と祖父母の家は車で五時間程のところにあるため、年に二回しか会えない。しかし、年に二回しか会えないことで知る祖父母のいろいろな姿があった。そこで知った祖母の姿は、毎日町の人々が使うそこそこ広い公園を毎日清掃するということであった。毎日清掃してくれているからこそ分かる公園の状況を詳しく、楽しく祖母は話してくれた。ペットボトルや食品ゴミ、雑草、犬のフンなど普通なら片付けずに放っておくのがあたり前であるが、私の祖母は、そのあたり前をくつがえすように、

公園を使用するたくさんの方のために清掃をしている。

去年の夏休みに祖父母の家を訪ねたときに時間があいていたので祖母と草むしりをした。私は学校や地域で掃除をするということがない限り、自分から町を掃除したことは無かった。そのようなことがあり、とてもすがすがしい気持ちになった。今までに感じたことのない世の中に貢献しているという喜びがあった。また、その気持ちと裏腹に今までなぜこのような簡単なことをしてこなかったのか、なぜ時間をつくろうとしなかったのか、今までしてきた自分の行為に悲しくなった。自分は平然と使っておいて、なぜ片づけは地域の方々に任せてしまっていたのかなど、自分の過去をふり返る大切な時間であった。私の意思で二日目も同様、清掃をした。

「公園の清掃ありがとうございます。」

どこからか女の人の声があった。散歩中の犬と嬉しげに笑っているおばさんであった。このときに、人のために自ら行動することは相手も自分も幸せな気持ちになれるとい

うことを、おばさんの優しい笑顔から感じた。例えば、誰も気づいてくれなかったとしても、いろいろな人の立場から物事を考えることは、相手に親切にするための大切な方法であると感じた。たった一人の行動でこんなにも相手の気持ちを考えさせてくれるとは自分自身でも驚きであった。祖母の行動は本当に小さな気づかいであったが、よく考えるところでも大きな存在であると感じられた。気づかなければ意味がないが、自ら動いて清掃をしている祖母は町の人々への小さく、優しい親切であった。今後、祖母のたくさんの方々への親切を胸に刻み、年に二回祖父母を訪れた時だけでもいいので少しでも自ら清掃に取り組もうと思う。まだ自分でも気がついていない小さな親切をしてくれている人がたくさんいると思う。そのような方々の親切があることで今の生活があるということを忘れずに、自分も自分なりの小さな親切をしながら毎日を過ごしたいと思うことができた。

これからの自分

磐田市立城山中学校 二年

曾根 未悠

お年寄りの方が多くなっていく未来では、「親切な言葉」「親切な行動」が必要になって行くのではないだろうか。私が必要のように思ったのは、春休みの時だった。

春休み真ただ中、私と妹は、浜松にいるいとこに会いに行く事になった。いつもなら車で行くけれど、父も母もその日は仕事で、二人で電車で行く事になった。最初は私も妹も、電車に乗るのが嫌だった。人もたくさんいるし、二人で電車に乗った事がないからだ。私も妹も、人見知りだから道を聞かれたらどうしよう、迷ったらどうしよう、と不安でいっぱいだった。しかし、母の、

「経験して学ぶことがある」

と言う言葉に背中を押された。二人で電車に乗るのは、とても緊張した。電車の中は、春休みということもあって、人がたくさん

乗っていた。最初は座るところがなくて、

つり革に掴まって、席が空くの待った。

次の駅で電車が止まった時、ちょうど席が空いた。ラッキーと思って、二人で席に座った。

電車に乗って来る人の中に、手に大きな

なかばんを持ったお年寄りの方がいた。もちろん座る席がなく、おばさんはつり革に

掴まった。私と妹は顔を見合わせた。こう

いう時、席を譲るのが正解なのだろう。けれど、私も妹もはずかしくて、なかなか行動にうつせなかった。もし、席を譲って断

られたら？「大きなお世話」と言われたら？

という不安が次々に襲ってきた。もしかしたら周りも気付いているかもしれない。そう思って、辺りを見回した。しかし、皆は

読書をしていたり、スマホをいじっていたり、下を向いて眠っている人がいた。誰も

気付いていない。そう思った。このまま座っていいのだろうか。なぜか急に、自分

がはずかしくなった。もし、ここで席を譲らなければきっと後悔する。もしかしたら、

おばさんも困っているかもしれない。私は

勇気をふりしぼって、おばさんに、

「あちらの席にどうぞ。」

と言った。おばさんは、一瞬驚いた顔をしたけど、笑顔で、

「ありがとうね。」

と言って、妹のとなりに座った。「ありがとう」たった一言なのに、とてもうれしく

思った。この時のことは一生忘れない思い出となった。

「経験して学ぶことがある」

母の言った通りだった。私は「小さな親切」

は「大きなお世話」と思っていたけれど、それは違う。親切な行動をすれば、相手も

自分も嬉しくなる。とてもいい事を学んだ。

「ありがとう」この一言が、自分が人の

役に立ったと思わせてくれる。自分がされて嬉しいことは、相手も嬉しいこと。そう

思うようにした。「見て見ぬふり」は一番

してはいけない。自分の選択次第で、未来

は大きく変わることだろう。

親切が親切を生む

静岡市立清水第二中学校 一年

堀 航太郎

夏休みに入っただけのことです。僕は、いつも自転車です。塾へ行っていますが、その日は雨が降っていたので、バスを利用することにしました。出発が遅くなったので、僕は急いで最寄りのバス停まで走っていき

ました。無事にバスに乗ることができ、ほっと一安心した僕は、運賃を用意しておこうと思い、財布の中を見ました。財布の中には百円しか入っていません。目的地までの運賃は百八十円です。

(しまった! どうしよう。)
僕はとてもあわてました。そして、はずかしい気持ちを押して、信号で止まった時にバスの運転手さんに、
「目的地までの運賃が足りません。」

と伝えました。そんな僕に運転手さんは優しい声で、

「お金は払わなくていいから、次で降りてお金をとりに行ってまた乗ればいいよ。」

と言ってくれました。しかし、百円あれば次のバス停までは運賃が払えることに気づきました。バスを降りてしまえば、塾には遅刻してしまいます。でも、お金を払わずに降りるわけにはいかないと思いました。

「ありがとうございます。でも百円はあるので、次のバス停で降りて歩きます。」と伝えました。

次のバス停に到着しました。お金を払って降りようとした時、いちばん前の席に座っていた若い男の人が、

「俺がこの子の分を払うのでこのまま行ってください。」

と運転手さんに言いました。どうやら運転手さんと僕との話を聞いていたようです。

「いいんですか?」
とバスの運転手さんがびっくりして男の人に聞きました。僕もびっくりしましたが、そんなことをしてもらうことはできないと思います、

「お金を払ってもらうことはできません。」
と言いました。でも、その男の人はにっこり笑い、

「大丈夫だから。このまま乗っていて。」
と言ってくれました。僕は、それ以上何も言えず、バスは出発しました。

(何て言えばいいんだろう。どうしたらいいのだろう。)

とあせっている間に、僕の目的地に到着しました。僕はせめてもと思い、持っていたお金を全部渡し、お礼を言ってバスを降りました。

家に帰ってから母に話すと、
「できれば、名前や電話番号を聞いたらよかったね。いつか、お返しできるといいね。」
と言われました。

バスの中で席をゆずる、困っている人に声をかける等、人に親切にすることはとてもいいことで、大切なことだとわかっていきます。しかし僕は今まで、わかっているも何だかはずかしかったり、こんなことしたら「おせっかい」ではないかと思ったりし

て、なかなか行動に移すことができませんでした。でも、実際に自分が親切を受け、とても助かり、嬉しい気持ちになることがわかりました。そして、「よし、次は自分が人に親切にしよう。」という気持ちになることに気づきました。

「親切は親切を生む」

僕は今回のことを忘れずに、「親切」というものを増やしていきたいです。

たった一つの靴が私を変えた

静岡市立安東中学校 一年

増田 夏実

放課後、友達と二人で家に向かって歩いていた時、道路に幼児用の小さな靴が片方だけ落ちていました。私はその靴を見た時、靴を誰かが落としてしまったのだろうと思いました。しかし、持ち主は誰だろうと思いつきながらも、その持ち主を探そうとはしませんでした。でも、一緒にいた私の友達とは違いました。私とその靴を通り過ぎようと

した時、友達は私の腕をつかんで、

「あの靴、きつとあそこにいる男の子の靴

じゃない？」

と、声をかけてくれました。確かに私は少し前お母さんに抱っこされた男の子とすれ違っていました。その友達と一緒に男の子を追いかけて少し戻してみると、予想通りその男の子は片方靴を履いていませんでした。しかも落ちていた靴と同じものをもう片方には履いていたのでした。そこで、友達二人は急いで靴を取りに行つてその靴を拾い、男の子を抱っこしていたお母さんに聞いてみました。そうしたら、やはりその男の子の靴だったことがわかりました。その時、お母さんの顔はとても嬉しそうに笑っていました。そして、

「本当にありがとう、助かりました。」

と、言ってくれました。友達二人はお母さんの笑顔と感謝の言葉により、自然に笑顔になり、靴を拾ってあげて良かったと心から思いました。それと同時に私は、一緒にいた友達に感謝の気持ちと、尊敬の気持ちが湧いてきました。

私はその後家に帰って考えていました。

もし誰もその靴を拾っていなかったらというのを。きつとあの親子はとても困ってしまっていたらどうと思いました。靴を通り過ぎようとした時の私は、その靴の持ち主の気持ちを考えていなかったのだということに気付かされてはつとしました。これはみて見ぬふりをしていることと同じです。でも私は友達と一緒にいたからこそ、このことに気付くことができ、無事に靴を持ち主に届けることができました。もし一人だったら、このような行動ができていなかったと思います。だから私は、もう二度と同じことを繰り返したくありません。私が出くわしたような出来事は日常生活の中でもよくあると思います。落とし物だけではありません。例えば、教室にゴミが落ちていたり、靴箱が汚かったり……。考えればきりが無いほど同じようなことは起こっています。つまり、私にできることはたくさんあるということなのです。このことをこれからの生活に生かしていくためにも、周りの状況に目を配り、相手の立場に立つ

て物事を考えていくことが大切だと思えます。そして、一人一人の意識により、多くの人が笑顔で幸せになれることを願っています。

私が出会ったラッパーお兄さん

静岡大学教育学部附属浜松中学校 二年

壬生 久葵

トマツタ。

殺人的な猛暑の中、片側二車線の道路で大きな揺れを最後に、母の運転する車が沈黙した。

「えっ、何で。」

母は、何度もエンジンをかけようと試みるが空振り、諦め電話を手にした。運が良いことに整備担当の人が近くを走行しているそうで十分弱で到着することだった。

母と私は、ほっとしてシートの背もたれに寄り掛かった。しかし、エンジンのかからない車内の空気は、ドロリと喉に張り付く。どうように母と私は、日陰に避難した。

そんな私達に、クラクションを鳴らし怒りを露わにする人やゴミ袋を投げつけてくる人がいた。

「迷惑かけちゃってるね。」

母は、ゴミ袋を拾うと体を小さくして言った。でも、母は、車が揺れ始めた時に路肩に寄っていたため、大型車以外は車線を変更しなくても母の車を追い抜くことはできるし、車の後ろには停止表示板も置いてあって、それほど迷惑をかけているようには見えなかった。しかし、すれ違う車からは氷の視線が投げられ、私は、晒し者の罪人になったような気分になった。そんな私たちに、追い打ちをかけるような旋律が近づいてきた。

ズツ、ズツ。ズン、ズン。ズンカ、ズンカ。

黒光りした背の低い車が、ラップのリズムを刻みながら近づいて来ると、母の車の前で停止した。母は、咄嗟に私を後ろ手に隠すと仁王立ちした。私の胸は、ティンパニを響かせた。怒鳴られると思ったのだ。しかし、

「どうした、バッテリーか。」

と優しい声が出た。私は、辺りを見回し、声の主を探した。

「変えたばかりなので、違うと思います。」

母は、気が抜けたような声で答えた。その相手は、ラッパー車から降りてきたお兄さんだ。

「見せてみ。」

お兄さんが、母の車に乗りしばらくすると、ブルブルル。

母の車が、弾んだメロディーを奏でた。母は、何が起きたか分からないような顔をしたまま、

「ありがとうございます。」

と、お兄さんに駆け寄った。

「エアコンを最大でかけると、馬力のない車は時々こうなるから、気をつけな。」

お兄さんは、自分の車に戻ろうとした。母は、急いで謝礼を渡しに行くこと、

「いらん、いらん。早く涼しい所に行きな。」
そう言うと、お兄さんは車を走らせた。ズンカ、ズンカ。お兄さんの車は踊りながら遠ざかって行った。それを見送る母の体は、ラップのリズムに合わせて揺れていた。

人は見かけによらないというけれど、お兄さんほど、ぴったりに人は私に出会ったことがない。あの時言えなかった「ありがとう。」お兄さんに届け。

私を救ってくれた親切

静岡市立東豊田中学校 二年

望月 愛莉

私は、いじめが原因で学校が嫌いになってしまい、あまり人を信じる事ができなくなりました。自分が自信がなくなりました。そして、自分に自信がなくなりました。私は、笑顔でいる時間が少なくなりました。しかし、今は優しく明るいクラスの友達と出会い、笑顔あふれる毎日を過ごしています。

私は、今でも体調が悪くなってしまう時があります。最初は、みんなに心配をかけたくないで無理をして平気なふりをしたり、笑ったりしていました。けれど、どうしても我慢できない時があります。そんな

時に、たくさんの友達が声をかけてくれて嬉しかったです。本当は話すのが怖かったけれど、勇気を出して悩みを話したら、みんな真剣に親身になって話を聞いてくれました。正直に話したら、みんな離れていってしまうと思っていましたが、私を否定するのではなく、私の良い所をたくさん言ってくれました。

「もっと自信を持って。」

などというアドバイスをくれたり、

「ずっと頑張ってきたんだね。もう頑張らなくていいんだよ。」

という優しい言葉をかけてくれました。そんな優しい言葉をかけてくれたみんなを、私は自然と信じられるようになっていました。

ある時、学校を続けて休んでしまった日がありました。私ที่บ้านで寝ていると、クラスの友達からラインがきました。どのラインも、

「クラスが寂しいから早く来てね。」

「明日は来れそうかな？みんな学校で待ってるよ。」

など、とても嬉しい言葉でした。そんな優しい言葉をかけてくれる友達がどんどん好きになりました。大人は、携帯やラインは良くないと言う人が多く、私も実際に良くない事もあると思うけれど、私にとってラインは、友達と私をつなげてくれたもので心の支えであり、学校で友達と話せるようになったきっかけになりました。

一つ一つの出来事は、みんなにとっては当たり前で小さな事かもしれないけれど、私にとっては暗い闇の世界からまぶしいくらいに明るい世界に連れ出してくれた大切な出来事です。みんなは、もしかしたら私に言ってくれた言葉など覚えていないかもしれないけれど、私はみんながかけてくれた言葉に救われました。

これから先も、私はたくさんの大きな壁にぶつかり、たくさんの人に助けをもらいながら生きていくと思います。私は今までみんなにもらった事、かけてもらった言葉を大切に過ごしていきます。大きな事はできなくても、私にできる小さな事をしたい、いつかみんなが私を助けてくれた

様に、私も人を助けられる人になりたいです。

親切は宝物。宝物は笑顔。

静岡市立豊田中学校 一年

森田 結衣

私は「小さな親切」というのは、大きな宝物だと、この時改めて思いました。

私が住んでいるのはマンションです。ここには全住民共通のエレベーターが一台あります。ですから、よく色々な人とエレベーターで会います。

これは、小学校四年生の頃の話です。私は、とても人見知りで他人があまり得意ではありませんでした。学校から帰ってきて、エレベーターに入り、正面を向いた時に、ふと誰かがいたような気がしました。エレベーターから見えるエントランスに人影が見えたのです。そのすぐ後、それは私と同じマンションに住む人だと分かりました。私の心の中には、

（あの人から、乗っている時に話しかけられたら、どうしよう。）

と困惑の気持ちが出てきました。そう思った私はすぐにエレベーターの「閉める」というボタンを急いで押して、エレベーターを閉めてしまいました。私は自分の家がある階に着いて、エレベーターの方へ振り返ると、やはりそのエレベーターは、一階へ向けて下がっていったのです。私はそれを見てとても罪悪感がありました。

数か月後、私はエントランスで取った新聞を読みながら、エレベーターの方へ向かっていました。ふと、視線を感じて顔を上げると、あの人エレベーターを開けて待っていてくれたのです。私はその人にお礼を言っ、自分のした行動の恥ずかしさに気がついて、その人の顔すら見られませんでした。

私は、この事があってから、「あのような思いは絶対しない。」と決め、自分のためにも相手のためにも、エレベーターは向こうから人が来たら、開けておいています。そうすると、相手も、

「すみません。ありがとうございます。」と、言っ、笑顔を作ってくれるのです。そう言ってもらくと、私まで嬉しくなっ、後ろの方でニコニコ笑顔になっ、しまいました。私は本当に気付かないくらい「小さな親切」でも、自分にとって笑顔になれる、そんな素敵な宝物だと思っ、ています。最近、公共の場などでも、それを応用して、います。

私の家の一階には足の不自由なおじさんがいるのですが、毎日、大変そうに歩いています。私は、そんな時に、廊下と自転車置き場をはさむ、手動の重いドアを開けておいてあげています。たまに、その人の奥さんの車いすのおばさんも通るのですが、そんな時はさらに心配りをして、車いすが通れるスペース作りをしています。そうするとやはり笑顔になっ、夫婦そろっ、

「ありがとうございます。」

私、笑顔が大好きです。私は色々な「小さな親切」の場面で笑顔を見え、きました。それが、今の私の元気の源です。これ

からも宝物探しに全力を尽くしたいと思いません。

僕を救ってくれたもの「笑顔」

浜松市立冨塚中学校 二年

谷口 朔崇

僕が今まで生活してきて、これぞ思いやりだと思ったもの、それは「笑顔」です。この笑顔はその他のどんな思いやりよりも、本当に心の底から出る思いやりだと思います。もし、困ったときにそのことを誰かに相談したとします。そのとき相談相手が大笑するときがあります。そのとき、まわりの人は、「相手に失礼だろう。」「笑っちゃダメじゃないか。」と言うかもしれない。でも、相談した人からすれば、「なんだ、こんなことでなやんだのか。」とかえって安心することも多くあります。さて、僕はこの笑顔に救われたことが何度もあります。その内の一つをお話しましょう。

僕は、小学校四年生のときから感情のコントロールが苦手になり、クラスで一日一回はケンカをしていました。そんな生活が嫌で人が嫌いになり、学校に行く日もへり、学校へいっても授業が始まると教室から出ていって、校内をフラフラして担任の先生に迷惑をかけていました。そのため小学校六年生のときから「発達支援学級」に入っています。中学に入り通常級に「交流」と言って授業へいくことができました。そのとき、

(僕は違うクラスにいるからヤバイやつだと思われて冷たくされるかも。)

とあっていました。しかし、実際にクラスへ行ってみると、みんなやさしく接してくれてとても安心しました。このとき僕が安心できた一番の理由が、「笑顔」でした。このとき僕は、

(まわりの人が笑っているだけで、こころで心が落ちつくのか。)

と思いました。だから僕も笑顔でいようと心の底から思いました。今では自分であまり意識せずとも笑顔のときが多くあり、笑

顔が消えていると、クラスメートに、「どうしたの?」

と言われてしまうほどになりました。そして、僕が笑顔で話をしていると相手も自然と笑顔になって話をするのがとても楽しくなります。

僕は笑顔が人と人をつなぎ、身のまわりの人をまた笑顔にしたいと思います。前にも書いたように、違う場所から来た人は笑顔を見ることができず、さらに人と人が話しているとき、片方が笑顔になるともう片方も自然と笑顔になります。このことの積みかさねでたくさんの方がつながり、たくさんの方が笑顔になります。こんなすごい力をもった「笑顔」に僕は何度も救われました。そして、これからもたくさんの方が救われるでしょう。

今までの生活の実体験から僕の思う思いやりは「笑顔」だと思います。

心の奥にある本当の優しさ

学校法人星美学園静岡サレジオ中学校 一年

山本 乃亜

私が、小学校に入学した頃から六年間、小学校を卒業する日まで、私を含めて同じ方面から電車で通学する子供達をずっと見守り続けた人がいます。その人は警察に勤務する人で、勤務先が私達の通う学校と同じ方向にありました。毎日同じ時間、同じ車両に乗り合わせます。私は、学校へ行くのに乗り継ぎを含めると約一時間かかります。特に入学したばかりの頃は、初めての電車通学に緊張や大きな不安を持っていました。そんな中、その人が私達に向ける眼は優しさとはげましていっぱいでした。私には心に残る忘れられない思い出があります。

一つは、四年生の時でした。電車の中で気分が悪くなった時の事です。前日、私は熱がありました。当日、熱が下がったので

登校しましたが、途中気持ちが悪くなり、冷や汗は出るし、とても立ってられないような状態になってしまいました。しかし、混み合った通勤通学電車。誰も席を譲ってくれる人はいませんでした。その時、その人が私の荷物を持って途中下車し、学校まで送り届けてくれました。私だったらきつと、「大丈夫？がんばってね。」とか、「気を付けてね。」そんな言葉しかかけなかっただろうと思います。言葉でできてもなかなか行動に移す事は難しいと思います。

二つ目は、五年生の土砂ぶりの雨の日の事でした。駅で、電車に乗りこむ時後ろにいた友達のくつが私のくつの後ろを踏み、私のくつが脱げ、線路に落ちてしまいました。後ろから押され乗車せざるをえませんでした。ドアが閉まり電車は発車してしまいました。私の足は片方くつをはき、もう片方はソックスのままビショビショにぬれ、何ともみじめな格好をしていました。私のそんな姿を見たその人は次の駅で私と一緒に降りて事情を話して下さり、くつを取りに行ってくれました。もし、私が一人

だったら、どうすることもできず、そのままの姿で登校していたかもしれせん。その人のおかげで、くつも戻り、無事に学校へ行く事ができました。自分のいそがしさや大変さをかえりみず、動いてくださることに心から感謝をしました。

四月から中学生になり、私の通学時間帯も変わりました。警察官の方の勤務先も変わり、お会いすることはほとんどなくなりました。私達をいつも見守って下さり、何度も手を差し伸べて下さった、その人の優しさと暖かさが、今も私の心に残っています。何の見返りも求めず、ただただ思いやりの心で人に優しく接したり、はげましたり、親切にすることは、すばらしいことと分かっている、何だかはずかしかったり、きまりが悪かったりで見えぬふりをしてしまうことが多い私です。でも、私が受けたその人からの親切な暖かな心を思い出し、困っている人や不自由な人がいたら勇気を出して声をかけたいです。

小さなことでも

富士市立大淵中学校 二年

山本 帆ノ果

バスケ部の大会で駐車場案内をするために朝、正門で立っていたときのことです。後ろから、

「すみません。」

と声をかけられました。立っていたのは、野球部の保護者でしたが、見慣れないチーム服を着ていたので他校の方だと思いました。

「トイレはどちらにありますか。」

と聞かれました。道順を説明しようと思いましたが、うまくできないので、

「私が案内します。」

と言いました。しかし、そうは言ったものの、初対面の人だったので、少し恥ずかしさがありました。

(運動場で野球をするなら、運動場のトイレの方が近いかなあ。でもこっちの方が近いから、こっちにしよう。)

ついてきているか後ろを振り向き、また前を見て、

(歩くペースこのくらいでいいかな。)

と思いながら歩き、トイレに着きました。

その方は、

「ありがとうございます。」

と言ってトイレに入りました。その間私は、(どうしようかなあ……。)

と考えました。このまま正門に戻るか、運動場への行き方を説明するか。そのトイレの場所から運動場まではそれほど遠くなかったのですが、トイレの場所が分からなかったのはこの学校に慣れていないからなのかかもしれないと思い、待っていることにしました。

(このあと運動場行きますか、あー行かれますかの方がいいかな。はいって言われたら、あそこの階段を下がったらすぐですって言おう。いいえって言われたら……。)

すると、あつという間に出てきました。

「この後運動場行かれますか。」

「はい。」

「じゃあ、あそこの階段を下りたら、すぐです。」

(思い切って言うことができた!)

「すみません、ご丁寧にありがとうございます。しました。」

その方は、微笑んで私にお礼を言い、運動場に向かっていきました。私はとてもうれしく、とても温かい気持ちになり、正門まで走って戻りました。私は、知らない人と話すのが苦手です。でも、だからこそ、自分から知らない人に声をかけるときに勇気が必要だということ、一人で慣れない場所にいる不安は、本当にわかるのです。

今回の私の行動は、ほんの小さな、小さな親切かもしれませんが、相手の心に親切が届き、「ありがとうございます。」と言ってもらえて、得をしたような清々しい気分になりました。今後もしも恥ずかしさなどからのためらいを捨て、誰に対しても、思いやりの気持ちを実行にうつしていけるようにします。